

# どうしたらしいの?

～きょうだい間の性暴力を知ったとき～

## (3) 加害をした子どもに対してすべきこと

被害者であるきょうだいと二人きりにしないような環境調整と見守りをしてください。

子どもが規則正しい生活を送れるように、大人が見守りをすることが大切です。

子どもの日常に关心を向け、コミュニケーションを図ること、そして家族みんなが安心して過ごせるためのルールを話し合い、守っていきましょう。

年齢にそぐわない過度な性情報は、子どもの性的な行動を引き起こしやすくなります。

テレビやパソコン、携帯電話などにはフィルターやパスワードを設定し、パソコンやテレビは、保護者が管理できるリビング等に置いて、**子どもが見ている情報を把握することが大切です。**

子どもは身近な大人の行動をモデルにしています。

大人が暴力や威圧を使っていると、子どももそれを真似してしまいます。

保護者も落ち着いた態度を心がけ、**気持ちを言葉で伝え合うようにしましょう。**

### どうして性暴力をふるうようになったの?

性的な問題行動に至る理由や背景はさまざまです。次の問題が背景にあることが多いといわれています。

- 子どもが衝動をコントロールする力が弱い
- 保護者がさまざまな課題を抱えていて、子どもの見守りが十分にできていない
- 子どもが過度な性刺激にさらされる機会がある
- 家庭や学校・地域などで、暴力で人をコントロールしようとする対人関係を経験した



## (4) 保護者もサポートを受けましょう

今回のことでの保護者自身も傷つき、今後どうしていくべきか、不安も大きいと思われます。

家族全員で取り組んでいかなければならないものの、夫婦間や親戚などの間で、お互いの考え方や気持ちにズレが起こることもあるでしょう。

そうした家族内や親戚との葛藤は、ますます保護者のストレスを高めます。

性暴力の話を聞くだけでつらくなってしまう保護者もいます。

子どもの頃に同じような被害を受けた経験を持っていると、気分が悪くなったり、もう考えたくないと思うことがあります。

そのように感じるのは無理もないことなので、**保護者も自分自身をケアすることが大切です。**

自分のための時間を毎日少しでもとるようにして、支えてくれる人々と過ごしたり、休息をとったりしましょう。

保護者はそれぞれの子どもを理解しながら、たくさんの対応をしていかなければなりません。

保護者自身も傷つき、ショックを抱えた状態で、どちらのきょうだいにも関わることは、とても大変です。

家庭内の安全をはかり、家族全員が回復していくためには、児童相談所等の**専門機関に相談しながら**、環境調整や、子どもたちへのケア、そして保護者自身の気持ちの整理を図っていくことをお勧めします。



これは、きょうだい間での性暴力が起きた家庭の保護者のためのリーフレットです。

性暴力の事実を知ったとき、大きなショックを受けられたことでしょう。

被害を受けた子どもへのケアだけではなく、加害をした子どもへの対応も必要になるため、保護者は一度にたくさんのことを行なわなければなりません。家族の生活全体も、大きく変わってしまうことがあります。

このリーフレットでは、家庭の安全・安心を回復するために、保護者に知っておいてほしいことやできることを紹介しています。

家族だけで問題を抱え込みず、児童相談所などの専門機関に相談をしながら、今後の対応を考えていきましょう。

# 子どもたちにとって必要なことを考えていきましょう。 こんな気持ちになっていませんか？

まさか、  
こんなことが！?

家庭のなかで  
起きたことだし、  
たいした  
ことではない

## 性的な遊びと性暴力、どこが違うの？

年齢差や体格差など発達の違いのあるきょうだい間での性的な接触や行為（からだや性器を触る、風呂やトイレをのぞく、下着をとるなど）は、遊びではなく性暴力です。  
年少のきょうだいが被害者になることが多く、性的な接触や行為を断れなかったり、意味がよくわからないまま応じていたりすることがあります。脅しや口止めをされて、だれにも言えずにいることもあります。  
身近なきょうだいからの性暴力により、被害者は混乱し、恐怖や苦痛、不安を感じます。

まずは、きょうだい間で性暴力が起きたという事実を認めることが大切です。  
家族だけで解決しようとせずに、専門家のケアを受けながら対応していきましょう。

気づいてあげられ  
なくて、ごめんね…

なんで、  
そんなことを  
したの！

## ＜驚き・ショック＞

きょうだいの間で性暴力があったということを知ったときには、あまりのショックに、信じられないとか、受け入れられないと思われたことでしょう。  
「なぜ、こんなことが起きたのだろう」「仲のよいきょうだいだったはずなのに」と、混乱されたかもしれません。ショックのあまり、体調を崩してしまうことも少なくありません。

## ＜否認・問題の軽視＞

ショックが大きいと、つい問題をなかったことにてしまいたくなる気持ちが生じがちです。「家庭のなかで起こったことだから」「親がしっかり叱ってやめさせればいい」と、問題を表すことにすることへの抵抗感をもつ家族もいます。しかし、被害を受けた子どもは、相手がきょうだいだからこそ、逃げられず、つらい思いをしています。また、加害をした子どもも、自分のしたことは性暴力であり、いけないことだと学び、適切な指導を受ける必要があります。

## ＜怒り・にくしみ＞

保護者は、「気づいてあげられなくて申し訳なかった」という気持ちになったり、「自分の育て方が悪かったのではないか」と自分を責めたり、親としての自信を失ったりすることがあります。

性暴力をふるった子どもに対して、許せないという強い怒りや、ときには憎しみすら覚えるかもしれません。  
一方、被害をうけた子どもにも、「どうしてすぐに言わなかったの！」「なぜ、逃げなかったの？」と責めたくなってしまう気持ちが生じるかもしれません。  
保護者としては、どちらも大切な子どもであるため、複雑な気持ちになります。

子どもを守るために保護者ができることはたくさんあります。  
事実を受けとめ、子どもたちのためにできることをしていきましょう。



## 子どもたちのためにできること

### ① 再び性暴力が起こらないように、家庭内の安全を確保していくことが第一

子どもが再び被害を受けることのないよう、すぐに**安全な環境をつくる**必要があります。  
場合によっては、加害をした子どもを、一時的に家庭外の施設や親戚宅などに預けることを考えなければなりません。そうしたからといって、それはその子どもを見捨てることではありません。いつまた家庭内で性暴力が起るかわからない状況では、どちらのきょうだいのケアも始められないのです。  
まずは安全な家庭環境をつくることは、サポートを始めるための前提条件です。  
家族がまた一緒に暮らせるようになる時期や条件は、被害を受けた子どもの気持ちを第一に考えながら検討します。  
場合によっては、長期にわたって、家族が一緒に暮らせないこともあるでしょう。それでも、**被害を受けた子どもの回復を第一に考えること**で、結果的には、加害をした子どもも、自分がした行動の責任を学んでいくのです。  
すぐには解決しないことがあります。保護者は焦らずに、少しずつ進んでいきましょう。

### ② 被害を受けた子どもの理解とサポート

きょうだいから性暴力を受けたことで、**子どもはとても混乱しています**。  
恐怖や嫌悪感だけでなく、きょうだいだからこそ親しみの感情もあるため、さまざまな気持ちの間で引きかれそうになるからです。  
被害を受けたあと、「言わなければよかった」「自分のせいで、大変になってしまった」と自分自身を責めてしまいかがです。  
被害のあと、何でもないようなふりをしたり、勉強やスポーツなどを今まで以上にがんばる子どももいます。「自分さえがまんすれば、また以前のような家族に戻れるのだ」という期待や、「親に心配をかけたくない」という自責感や申し訳なさを感じていることがあるからです。  
**本人が悩み打ち明けやすい関係**をつくることが大切です。そして、子どもの気持ちや状態を理解し、できるかぎりのサポートをしてください。子どもが見守られているという**安心感と安全感を高める**ことが大切です。  
性暴力を受けたことにより、頻繁に自慰行為（性器いじり）をしたり、性的な話や性行動に関心を持つようになることもあります。  
思春期を迎えてから、不安定な性的関係をもったり、不調になったりすることもありますので、**長期的に様子を見守ってください**。



### 性暴力を受けた子どもにみられやすい反応

- 落ち着きがなくなる
- 夜眠れない、悪夢を見る
- 食欲がなくなったり、食べ過ぎたりする
- 赤ちゃん返り（指しゃぶり、おねしょ）
- 加害者に似た人をこわがる
- 口数が少なくなる
- 学校に行きたがらない、成績が下がる
- 以前楽しめていたことに興味を示さなくなる
- ちょっとしたことで怒る
- 自分のからだを傷つける（自傷行為）
- 過剰にいいこになろうとしてがんばる
- 年齢不相応の性的な関心や性行動がみられる

被害を受けた子どもに責任はありません。  
「よく話してくれたね」「あなたが悪いんじゃないよ」と伝えてください。